様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２３１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２８９１

研究課題名（和文）学習アセスメントを軸とし学習改善を促進する組織的授業研究に関する実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study on Organizational Classroom Research to Promote Learning Improvement Based on Learning Assessment

研究代表者
山本　佐江（Yamamoto, Sae）

育英大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０７８３１４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、組織的授業研究を可視化し、カリキュラム・マネジメントを通して持続的な授業改善を行い、学校をエンパワメントするミドルリーダーの職能成長の有り様を明らかにすることである。授業研究の視点として、学習アセスメントを重視し、従来の評価方法以外に、学習の最中に自動生徒の学びの証拠を引き出す形成的アセスメントを実施することで、授業研究においてミドルリーダーが積極的な役割を果たすことを可能にした。また、そのリーダーシップによって、授業研究にあり方をモデル化することができ、学校全体で組織的に授業改善へと向かう道筋が開けることを見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、持続的な授業改善が起きるようにするためミドルリーダーが率先して授業研究を行い、形成的アセスメントを活用した改善モデルとして、授業研究を通した組織的な学校改善に資する様子を具体化した。学術的意義として、従来別の領域と捉えられてきた授業研究、学習アセスメント研究、ミドルリーダー研究の一体化が図れ、ビジョンの実現に向けてアラインメントされる実相が見出されたことが挙げられる。社会的意義としては、組織的な学校改善をスクールリーダーのみならずミドルリーダーからボトムアップ的に実施することによって、学校全体がエンパワメントされる関係が明らかになったことが挙げられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to visualize systematic classroom research and to clarify how middle leaders can develop their professional skills to empower schools through curriculum management and sustainable classroom improvement. The study emphasizes learning assessment as a perspective of class research, and by conducting formative assessment that elicits evidence of automatic student learning during learning, in addition to traditional assessment methods, it enables middle leaders to play an active role in class research. We also found that this leadership enabled the modeling of the way classroom research should be conducted, and opened the way for systematic school-wide movement toward classroom improvement.

研究分野：教科教育学

キーワード：ミドルリーダー　学習アセスメント　カリキュラム・マネジメント　授業研究　職能成長　対話的フィードバック

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

「学びに向かう力，人間性など」「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力など」の３つの柱で整理された資質・能力の育成を目指すため，よりよい学校教育がよりよい社会を創るという理念のもと，学校の教育活動の質を向上させることが必須となってきた。そのためには学校の全教職員が力を合わせて連携し，教育課程を自家薬籠中のものとしてナラティブに語り合い，アセスメントの形成的機能により学びをつくり出して育てていかなければならない。

研究開始当初の学術的背景を，主に（1）学習アセスメントとカリキュラム・マネジメント，（2）組織的学習づくりのミドルリーダーシップの点から整理する。

（1）　学校全体として組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図るため，「学習指導」と「学習評価」は学校の教育活動の根幹であり，教育課程に基づいて組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図る「カリキュラム・マネジメント」の中核的な役割を担っている。「学習指導」は，学校教育の中において最も関心の高い分野であり，教育目標を達成するために，何を（内容），どのように（指導法）指導するかについて多くの提案がなされてきた。一方，「学習評価」とは，学習指導要領の目標の実現状況を把握し指導の改善に生かすものであり，また，学校における教育活動に関し児童生徒の学習状況を評価するものである。評価は，試験や成績といった後付けの狭いイメージでとらえられることが多かったが，本来評価は多角的・多面的なものであり，児童生徒の学習状況を的確に捉える方法は，多様に存在する。中でも，近年，学びをつくり出し育てる形成的機能としての学習評価に注目が集まっている。さらに，教育課程や指導方法の改善との一貫性，カリキュラム・マネジメントを通した一連の教育活動全体の見通しなど，従来の学習評価よりも概念的な拡張が必要となってきた。そのような機能を明確化するため，本研究では「学習評価」を「学習アセスメント」と呼ぶこととした。「学習アセスメント」は，OECDCERI(2005)によると，形成的に機能することで学力の向上を促す最も効果的な戦略の１つとなり，「学び方を学ぶ」ことを通して自己調整能力を身に付けることを目的とする。評価情報の収集と縮約，およびフィードバックを通じて学習状況を可視化することができ，学習や授業の改善の見通しが明確となるものである。

（2）　組織的学習づくりとは，子ども・教師・保護者や地域も巻き込んだ学びを学校が核となって成立させることである。学習アセスメントにより明確化された課題を，学校教育目標や経営目標と関連付けて，組織的な課題解決へと働きかけられる人材がミドルリーダーである。本研究では，ミドルリーダーに着目し，学校内外において持続的に知識創造を担っていく役割を，授業研究において検討する。ミドルリーダーは，必ずしも職制に依存したリーダーとは限らず，個人と組織をつなぐ中間に位置し，リーダーにふさわしい力量をもち，世代間の対話を促進する存在であると定義する。授業研究の過程で，形成的アセスメントの研鑽を深め，授業や評価に関する共通の用語を精緻化していくことで，世代間の対話が成り立つと考える。学び続けることが困難な現状だからこそ，ミドルリーダーが改善の中心となって，組織的学習をつくるためのリーダーシップが発揮できるような学校文化の育成が重要となる。

２．研究の目的

本研究の目的は，学習アセスメントを活用して組織的授業研究を可視化し，カリキュラム・マネジメントを通した教師のミドルリーダーへの職能成長を実現する持続的な授業研究のあり方を明らかにすることである。

教師の仕事は多岐に渡っており，学校を取り巻く教育的課題も増え続けている現状においては，教職の魅力が若い世代に伝わらず，教師を目指す学生の減少が取り沙汰されている昨今である。教師採用試験の倍率の低下と共に，教師の質をどのように担保すればよいのかについても，議論に上がっている。そのような中で，学校において，直接的に児童生徒と関わりながら日々の授業改善に実質的な役割を担い，他に率先して多様な教育活動の企画立案を行っているのは，ミドルリーダーたちである。その意味において，学校の中心的存在となるミドルリーダーは，どのような意欲や働きがいをもち，日々の教育活動を行っているのだろうか。また，個人として自己充足感を得るだけではなく，校内全般を見通し，世代の異なる教師たちをつなぎながら，どのようにして改善の取り組みを行っているのだろうか。子どものウェルビーイングは，教師のウェルビーイングに支えられると考えられる。

そこで，ミドルリーダーが，大きな関心を寄せる授業改善を基盤にした教師の学びにについて，授業研究を通して考察した。なぜなら，授業研究とは，授業だけで完結するものではなく，学習アセスメント，カリキュラム，指導と学習を一体化する視点で包括的に捉えるべきものであり，学習アセスメントによる成果をカリキュラム・マネジメントの一環として学習及び指導，教育課程の改善，学校の組織的な改善へと生かすことを目指すものだからである。

３．研究の方法

研究方法として，以下の２つの側面から研究を遂行した。文献や実践から，学校のどのような学習アセスメント実践が有効的に機能するか理論的に考察し，事例調査のための視点や枠組みを明確化した。また，ミドルリーダーとして，授業研究を積極的に行い，校内で研究授業を実施して他の教師のモデルを務めている教師３人の，実際の授業観察とインタビュー調査を通して

事例調査を行った。

４．研究成果

学校におけるミドルリーダーの位置づけを明確化した。ミドルリーダーは，ここ 20 年ほどの間に，研究テーマとして取り上げられる機会が増え，実践現場においても自治体による「ミドルリーダー研修」が盛んになってきた。しかし，論者によってその位置づけは曖昧である。「管理職と教職員の中間的立場で，学校組織づくりの中核的役割を担う教務主任，学年主任，教科主任などの主任層」（淵上　2009：52）のように職務としての捉え，「30 歳前後から 40 歳代の教師が想定されている中堅教師」（八尾坂 1998）のような教職経験としての捉え，「職制を超えた，もしくは職制によっては包みきれない機能，役割」（小島 2010：82）を果たす機能としての捉えがある。本研修では１の（2）で述べたように，機能として概念化した。

次に，ミドルリーダーへの役割期待として，一般経営論の流れを汲み，「ミドル」としての中間管理職を「連続的イノベーションの鍵」（野中・竹内 1996：189）と捉える見方の中で，学校における知識創造の要を担い，特に授業研究によって学校全体の日常的な授業改善につなげる役割の重要性を特定した。それは，暗黙知を形式知に転換し組織的に創り出した知識を共有することでなされるものであった。このことから，可視化された学習の影響のトップに位置づけられる「教師の集団的効力感」，すなわち「学校の教師集団が一丸となって生徒たちにプラスの効果をもたらすために必要な一連の行動を実行できるという学校での教師たちの認識」を促進するという役割が，ミドルリーダーにとって重視されるべきものであることが確認された。

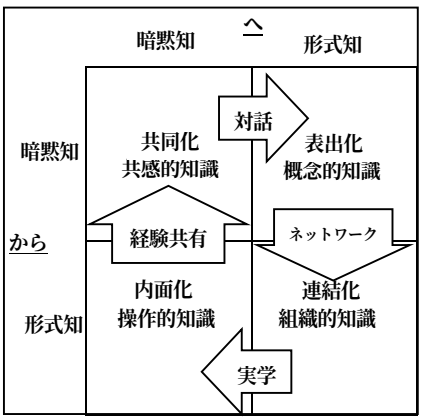

図１　知識転換の４つの様式（Wiliam,2016）

表１　生徒の成績に関連する影響と効果量（Hattie，2018）

順位	影響	効果量
1	教師の集団的効力感	1.57
2	能力レベルの自己評価	1.33
3	教師による達成度の見積もり	1.29
4	認知的課題分析	1.29
5	介入に対する反応	1.29
6	ピアジェのプログラム	1.28
7	ジグソー法	1.20
8	概念変化によるプログラム	0,99
9	事前の能力	0.94
10	先行知識と統合した方略	0,93

これらの検討を踏まえて，４人のミドルリーダーの事例研究を行った。１人目は，一旦中学校で教職に就いた後，教科教育学専攻の大学院に入り，そこで出会った指導教官や派遣の先輩教師によって大きな影響を受けた。大学院修了後は，市の教科教育研究の中心となって運営してきた。学校や地域で初任者教師の指導を担当する総括指導教員になり，実践現場における教師教育者としての自覚が高まった。そのため，対話的リフレクションという手法を取り入れ，授業の省察場面で授業者との対話を通して新たな改善点を自ら見出せるように働きかけている。初任者指導の過程を論文化して投稿し，自らの学びを深めている。２人目は，２校目の中学校で教科主任として率先して内外に授業を公開し，継続的に「証明問題の指導法」の研究を深めている。文化祭担当や進路指導主任など校内でも負担の多い役職を任されることが多いが，多忙さの中で教職の柱を授業研究に置くことを自負している。年に幾度か独自のパフォーマンス課題を設定して生徒の意欲を高めている。ルーブリックを活用して評価し，校内にその評価法を広めた。３人目は，小学校で学力向上主任であり，校内研究で授業を行うだけでなく，大学と連携してレッスン・スタディのモデル授業を海外からの参観者に年に数回公開している。オープンな授業研究の姿勢が，他の教師たちに支持されて校内全体の授業改善を促し，結果として児童の学力を向上させた。４人目は，教職大学院に派遣されたことが契機となり，研究主任として新しい学びのあり方を提言し，管理職と協働で学校組織の活性化を図るようになった。教師の学びが個で完結するのではなく，授業研究のあり方を変えることを通して学校全体の組織的学びを誘起した。その結果，校内で世代間の対話が豊かになり，教職員間で協力して問題解決にあたることが増えた。

事例から以下のことが結論付けられた。１つ目は，ミドルリーダーは，主体的な自分の学びを公開し共有化することによって，学校の文化を形成していく一端を担っているということであ

表２　学習アセスメントへの２つの主要なアプローチの比較（Wiliam,2016）

教育データによる児童生徒の学力向上	教室の形成的アセスメントによる教師の質の向上
質の制御	質の保証
共通アセスメント	形成的アセスメントの方略と技術
よりよいティームワークとシステムによる改善	教師の能力向上による改善
児童生徒の個々の成績に焦点を当てる	教師個々の担当責任に焦点を当てる
データの基づく定例の会議	教師の改善に焦点を当てた定例の会議

る。ミドルリーダーの優れた授業実践に刺激を受けた同僚は，自分自身も学びを深めていく必要性に気づいていく。また，その際に鍵となるのは，人が急速に変わるように上から変化を押し付けるのではなく，あくまで同僚としての立場からの横のつながりや信頼感を築くことである。このようなミドルリーダーの存在が学校の組織的学びを推進していくことが明らかになった。２つ目は，学校全体の学習を向上させるために，表２にあるように学習アセスメントへの相補的アプローチが必要なことである。ミドルリーダーは，役職面からもその双方にかかわり，アセスメントによって校内の学習を可視化していく存在である。カリキュラム・マネジメントは，データのみの解釈によるのではなく，教室の形成的アセスメントも重視することで指導と評価の中核となるのである。その推進主体となるのは，児童生徒と直接向き合いながら学校全体の組織経営への視点も備えたミドルリーダーなのである。

５．主な発表論文等

[1] 山本佐江(2024)．国語科の授業事例における対話的フィードバックの考察－バフチンの対話論に基づいて－（査読付），育英大学・育英短期大学教育研究所第 2 号

[2] 山本佐江(2024)，アメリカ国語授業におけるリーディングの考察－「評価」の視点で見る厳しさ－，育英教育研究論集第１号

[3] 山本佐江(2023)．間違いの場面で分かち合う文化的台本の考察-秋田市の算数・数学教室における評価の事例から-(査読付），あきた数学教育学会学会誌第 5 号

[4] 松本佑介，山本佐江，草原和博(2023)．模擬授業後の協議会における教師教育者のフィードバック改善に向けたセルフスタディ，学校教育実践学研究 29

[5] 山本佐江(2022)，教室アセスメントにおける学習の調整 -自己調整学習から共同調整学習へ-，帝京平成大学児童学科研究論集 13

[6] 有本昌弘，山本佐江(2022)．伊那小学校における「見とり」 －社会文化的な視点でのアセスメントと評価－，東北大学大学院教育学研究科研究年報 70(2)

[7] 山本佐江(2022)．主体的・対話的で深い学びに役立つフィードバック概念の考察―高等教育からの示唆，帝京平成大学児童学科論集第 12 号

[8] 山本佐江(2021)．持続的な校内研究に基づく形成的アセスメントの実践－秋田市立築山小学校の事例より－2021 年 3 月 "帝京平成大学紀要第 32 巻

[9] Masahiro ARIMOTO, Shin HAMADA (2021). What we informed Academy of Principals Singapore (APS) of classroom assessment in the Asia-Pacific Educational Assessment Conference (APEAC) 2017 and its reflection, Annual Bulletin, Graduate School of Education, Tohoku University7

[10] 有本昌弘・西塚孝平(2020)．データ収集による高等教育分野における 教育アセスメントと評価への貢献，東北大学大学院教育学研究科研究年報，第 69 集・第１号

[11] 山本 佐江(2022)．フィードバックを核とした形成的アセスメント，指導と評価 68(9)，

[12] スター・サックシュタイン(著)，中井，悠加，山本，佐江，吉田，新一郎(翻訳)，『成績だけが評価じゃない ： 感情と社会性を育む(SEL)ための評価』新評論

[13] スター・サックシュタイン(著)，田中理紗，山本佐江，吉田新一郎（翻訳）(2022)，『ピア・フィードバック ： ICT も活用した生徒主体の学び方』

[14] 合田美子，石毛弓，山本佐江，可部繁三郎，田中洋一(2024)．研究シンポジウム：自身の成長のために有用なフィードバックをどう誘起するのか，日本教育工学会 2024 年春季全国大会

[15] 可部繁三郎，田中洋一，山田政寛，石毛弓，山本佐江，合田美子(2024)．フィードバック誘起モデルの開発：量的モデルによる推計子規の試作，情報処理学会第 42 回 CLE 研究発表会

[16] 山本 佐江(2022)．間違いを通して教室で分かち合う文化的スクリプト：秋田市算数・数学教室のアセスメント場面の考察 ，日本教師教育学会第 32 回研究大会(秋田大学)

[17] 石毛弓，合田美子，山本佐江(2022)．フィードバックを活用する仕組みづくり，大学教育学会第４４回大会

[18] 山本 佐江(2021)．教職実践演習における模擬授業プログラムの検討 －特別な支援を要する児童に配慮した授業づくり－．日本学校心理士会 2021 年度大会

[19] 山本佐江(2021)．組織的授業実践に基づく「見取り」の評価の検討 ―形成的評価から形成的アセスメントへ―，日本教育方法学会第 57 回大会(宮城教育大学)

[20] 山本 佐江，石毛 弓，可部 繁三郎，田中 洋一，山田 政寛，合田 美子(2021)．学習者の視点でとらえたピア・フィードバックの特徴，日本教育工学会 2021 年春期全国大会

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 山本佐江	４．巻 2
２．論文標題 国語科の授業事例における対話的フィードバックの考察－バフチンの対話論に基づいて－	５．発行年 2024年
３．雑誌名 育英大学・育英短期大学教育研究所	６．最初と最後の頁 1－12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山本佐江	４．巻 第5号
２．論文標題 間違いの場面で分かち合う文化的台本の考察-秋田市の算数・数学教室に おける評価の事例から-	５．発行年 2023年
３．雑誌名 あきた数学教育学会学会誌	６．最初と最後の頁 2－12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松本佑介、山本佐江，草原和博	４．巻 29
２．論文標題 模擬授業後の協議会における教師教育者のフィー ドバック改善に向けたセルフスタディ	５．発行年 2023年
３．雑誌名 学校教育実践学研究	６．最初と最後の頁 124－139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本佐江	４．巻 13
２．論文標題 教室アセスメントにおける学習の調整 -自己調整学習から共同調整学習 へ-	５．発行年 2022年
３．雑誌名 帝京平成大学児童学科研究論集	６．最初と最後の頁 1－8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 有本昌弘， 山本佐江	4．巻 70-2
2．論文標題 伊那小学校における「見とり」 －社会文化的な視点でのアセスメントと評価－	5．発行年 2022年
3．雑誌名 東北大学大学院教育学研究科研究年報	6．最初と最後の頁 121-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山本佐江	4．巻 11巻
2．論文標題 主体的・対話的で深い学びに役立つフィードバック概念の考察―高等教育からの示唆―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 帝京平成大学児童学科研究論集	6．最初と最後の頁 15－22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山本佐江	4．巻 第32巻
2．論文標題 持続的な校内研究に基づく形成的アセスメントの実践－秋田市立築山小学校の事例より－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 帝京平成大学紀要	6．最初と最後の頁 203-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 有本昌弘・西塚孝平	4．巻 第69集・第1号
2．論文標題 データ収集による高等教育分野における 教育アセスメントと評価への貢献	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東北大学大学院教育学研究科研究年報	6．最初と最後の頁 245-264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Masahiro ARIMOTO, Shin HAMADA	4．巻 7
2．論文標題 What we informed Academy of Principals Singapore (APS) of classroom assessment in the Asia-Pacific Educational Assessment Conference (APEAC) 2017 and its reflection	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Annual Bulletin, Graduate School of Education, Tohoku University	6．最初と最後の頁 1－29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 合田美子、石毛弓、山本佐江、可部繁三郎、田中洋一
2．発表標題 研究シンポジウム：自身の成長のために有用なフィードバックをどう誘起するのか
3．学会等名 日本教育工学会2024年春季全国大会
4．発表年 2024年

1．発表者名 山本佐江
2．発表標題 間違いを通して教室で分かち合う文化的スクリプト：秋田市算数・数学教室のアセスメント場面の考察
3．学会等名 日本教師教育学会第32回研究大会(秋田大学)
4．発表年 2022年

1．発表者名 山本　佐江
2．発表標題 組織的授業実践に基づく「見取り」の評価の検討　―形成的評価から形成的アセスメントへ―
3．学会等名 日本教育方法学会第57回大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 山本 佐江，石毛 弓，可部 繁三郎，田中 洋一，山田 政寛，合田 美子
２．発表標題 学習者の 視点でとらえたピア・フィードバックの特徴
３．学会等名 日本教育工学会2021年春期全国大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 スター・サックシュタイン(著）中井悠加，山本佐江，吉田新一郎[翻訳)	４．発行年 2023年
２．出版社 新評論	５．総ページ数 250
３．書名 成績だけが評価じゃない ： 感情と社会性を育む(SEL)ための評価	

１．著者名 スター・サックシュタイン(著）　田中理沙・山本佐江・吉田新一郎[翻訳)	４．発行年 2021年
２．出版社 新評論	５．総ページ数 210
３．書名 ピア・フィードバックーICTも活用した生徒主体の学び方	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	有本　昌弘 (Arimoto Masahiro) (80193093)	東北大学・教育学研究科・教授 (11301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関